

「大腸癌の構造」

筑波大学教授 中 村 恭 一 著

国立病院九州がんセンター医長

清 成 秀 康

大腸癌は近年本邦でも増加傾向にあるが、組織発生についての考え方は“大腸癌の大部分は腺腫経由である”が一般に受け入れられている。著者は本書において上記の説とは異なり、大腸癌は大腸粘膜から直接発生する“de novo cancer”が主流であると主張し、この結論に到達する過程を医学書としての正確な記述に加えて、読物としても平易な語り口で興味深く、著者一流の精緻な論理の展開を辿らせてくれる。

イラストにあるように、“大腸癌の発生は腺腫経由”という従来からの説が、多くの矛盾や不確かさの基盤のうえに危うく立っていることを多くの臨床的、病理学的事象の集積によって明瞭に浮かび上がらせ、次に誰もが経験し、納得できる、例えば幾何学の公理のような事象から再出発し、帰納、演繹、背理法と論理

学的手法を駆使して“大腸癌は正常大腸粘膜から”という大腸癌組織発生の論理体系を新たに構築している。

この作業の過程でどうしても避けて通ることができず、著者が最も苦心し多大な知的、肉体的エネルギーを費やしたと思われること、すなわち“病理組織診断基準の客観化”こそはこの本の最大の骨子の1つである。臨床、病理を問わず、形態学の持つ宿命的な弱点である“あいまいさ”，すなわち個々人の能力、経験、認識力、判断の違いによって、唯一であるべき結論が幾通りにもなってしまうという難問題を解決すべく敢然と挑戦している。具体的には実際に即したH・E染色，またはヘマトキシリン単染色組織標本をコンピューター画像解析装置を使って，細胞異型度を“核腺管係数”，腺管

異型度を“乱れ係数”として数値化し良悪性を判定している。長い長い病理学の歴史を通じて誰もが一度は夢想したであろう“組織診断”の客観化という問題に解決の一步を踏み出したことは極めて大きな知的作業の結実であると思われる。

大腸癌発生の考え方の正しさについて論じるとき“共通の言語”として“組織診断の客観化”がなされないならば，議論はいつまでも不毛のままに終わるであろうという著者の主張，それは至極当然である。

著者の呈示した組織診断客観化の手法は更に工夫改善されてゆくであろうが，1人の経験豊かな病理学者であろう著者が，長年にわたって築き上げた権威をかなぐり捨てて病理組織診断の出発点である太初混沌にまで飛び降りた勇気は賞賛してあまりある。これより先，大腸癌の組織発生について発言する学者がこのことを避けて通る限り，それは自然科学を職とする者の名に値すまい。病理診断の正しさが，ときとして権威と比例する現状がこれからも続くのか？ 論理を辿って結論へと到達する真の科学へ転換していくのか？ 興味深いところである。

本書は“大腸癌の組織発生”という大命題についての積年の研究の帰

結であるが、これはまた著者が二十年以上にわたって消化管病理学に論理性を与えようと努めてきた一連の仕事の延長線上にあると思われる。

湯川博士による中間子論のように、理論物理学者により呈示される仮説が、実験物理学者により証明されて真理として定着するのが物理学の進歩のパターンの1つである。著者もまた、柔軟で深い思索から生まれる理論病理ともいべき仮説を、膨大な臨床病理学的事実の集積をもとにした実験物理に対応する臨床病理としての解析により証明してゆくという手法を1人で成し遂げている。

今、1人の臨床医として個人的回顧を許していただくと、1972年、同じ著者の「胃癌の病理」に接して強烈な知的インパクトを受けた記憶が生々しく蘇る。更に1982年出版

の「胃癌の構造」では、一層深い洞察と解析がなされ、胃癌について、その成り立ちや行動をくっきりと理解することができた。そのときまで病理診断を最終の託宣として受け止めて、その診断過程を一種神秘的な不可侵の領域と感じていたのが、著者特有の幾何学的とさえいえる論理的な説明により、病理診断あるいは病理学が急に身近に感じるようになった経緯がある。

この著者のように、1人の研究者が送り出した独創的な、しかも証明により導かれたところの学説、例えば「胃潰瘍と癌」、「胃異型上皮巢」、「胃癌の組織発生」、「胃底腺粘膜から発生する癌」、「Linitis Plasticaの原発巣」等々が、臨床の分野で正しい診断を得るために、また正しい治療方針を決定するために不可欠の知識となっていることは大きな

驚きである。日常の診療活動上、日々その業績の恩恵を受けている者の1人としてこの紙面を借りて感謝したい。

これから大腸癌の組織発生論がどのように展開して、どこに帰結するのか更に論争が続くと思われるが、折しも東欧世界では長い年月、巨大なイデオロギー構築物として偉容を誇ってきた「共産主義の構造」が、その基盤をなす人間性の解釈や、政治原理、経済原理などに内包する多くの矛盾のために音を立てて崩壊しつつある。歴史的転換を目撃できる幸運に恵まれた者として、両者の行方を十分に目と耳を澄まして見守りたい。

B5判 232頁 1989年 送料300円
定価9,991円(税込) 医学書院刊